

胆・脾

(218-222)

最近 deconvolution analysis による画像処理が臨床に応用されてきているが、肝・胆道系への応用として今回、3題の演題発表があった。武中ら(昭和大)は各種び漫性肝疾患を対象としてフィルタ関数の下降部の時定数(dKe)およびdKeと機能体積との積(total liver transfer index, TI), 平均通過時間(MTT)を求め、それぞれの間および種々の肝機能との間に良好な相関関係があることを報告した。特に TI は全肝機能の指標として興味がもたれる。栗原ら(東京都老人医療センター)は Rutland 法を併用した処理法を検討して各種肝疾患に応用し、平均通過時間(MTT)を求めた成績を報告したが、MTT の正常値7分が低すぎるとの意見があり、その理由について討論が行われた。代償期肝硬変症で血中クリアランスの遅延にもかかわらず MTT が正常値を示す例があるとの興味ある報告がされた。佐久間ら(福井大、三重大)は肝内局所伝達関数から経時的動態画像を再構成して肝硬変症の診断に応用した。この方法は肝に RI をボーラス注入した時の経時的イメージに相当する。本法により肝硬変症における排泄遅延、特に区域性排泄遅延が通過時間のイメージより明瞭に描出されると報告した。

次いで肝胆道シンチグラフィによる肝細胞癌の診断について2題の発表があった。多田ら(国立金沢病院)は各種肝腫瘍例に $^{99m}\text{Tc-PMT}$ 肝胆道シンチグラフィを行い、その delayed image で肝細胞癌の 65% に異常集積を認め、他の肝腫瘍では陽性例はなかったとの成績を発表した。本法は全身スクリーニングによる存在診断、各種治療後の経過観察にも有用であると報告した。長谷川ら(大阪府立成人病センター)は $^{99m}\text{Tc-PMT}$ と $^{99m}\text{Tc-EHIDA}$ の両者の比較を行った結果、肝細胞癌へ取り込

みがみられる割合は両者とも 66~67% 程度であるが強い取り込みを示す割合が $^{99m}\text{Tc-PMT}$ の方が高いことからその有用性を述べた。

(中川毅)

(223-227)

担当した演題は 223~227 までである。

[223] 栗原らは原因不明の右季肋部痛をきたす症例および胆摘後の一症例では cerulein 筋注後に下部肝内胆管の activity の再上昇をみとめるという。胆道系感染を繰り返す症例には追試してよい方法である。

[224] 小堀らは消化管再建術後の肝胆道消化管の同時 scan を行い cine 表示を用いた動的観察を行い流出状況を観察した。

[225] 斎藤らは脾疾患術後の残存脾分泌機能検査として $^{75}\text{Se-selenomethionine}$ を用い SPECT を実施し残存脾の外分泌能の程度について報告した。

[226] 山本らは脳血流シンチグラム剤として開発された $^{123}\text{I-HIPDM}$ が脾も描出することより脾シンチグラムについて検討した。健常例では投与3時間後に脾が描出され、SPECT を実施すると肝や脾と同程度の放射能集積をみとめ、現在脾シンチグラムではあまり有用な製剤がないので、今後この方面的研究が盛んになると考える。

[227] 久保らは O-15 標識 water を用いて脾部の PET による dynamic scan を行い、脾の血流量を計算し、Image を作製している。脾癌では defect を示したが、非癌部でも血流の低下をみとめている。この方法は他の因子が加わりやすく、実用化されるにはさらに時間を要すると考えられる。

(長瀬勝也)